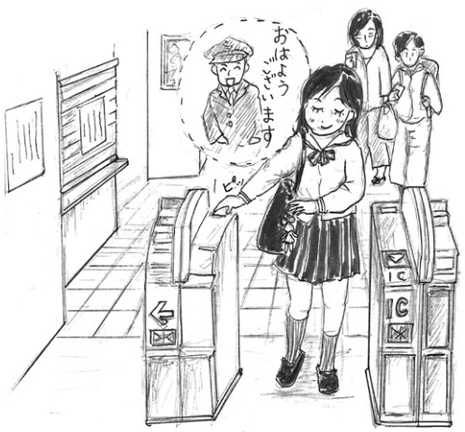
優秀賞

おはようございます

岐阜県 多治見西高等学校二年　勝野 陽向

「ピピッ。」
改札がいつも通り軽快な音を鳴らす。
「おはようございます。」
改札付近の窓口にいる駅員さんが、今日も挨拶をしてくださる。
「おはようございます。」
と、大きな声ではないが、私も挨拶を返しながら改札をくぐる。
「いってらっしゃい。」
駅員さんに見送られ、私は小さくぺこりと頭を下げる。「おはようございます」「いってらっしゃい」。私の朝は、いつもその言葉から始まる。
普段、何気なく行っていることがある日突然無くなってしまったら、一体どんな気持ちになるのだろう。そんなことを日々考えて過ごす人は多くないだろう。私も、日常化していたものがある日突然に無くなってしまうだなんて思いもしなかった。
高校一年の秋。九月に入っても、まだ暑さが長引いていた時のことだった。私の利用する最寄駅は、行き帰りの通学時間は、人が比較的多く、電車内もいつも賑わっていた。中学から電車通学のため、すっかり通学も慣れ、早くも四年が過ぎようとしていた。そんな日常化している通学の中で、一つの楽しみがある。それは、行き帰りの駅員さんとの挨拶だ。朝は「おはようございます」。帰りは、「ありがとうございました」といった、ごくわずかな挨拶。いつから始まったのか分からなかったが、朝は見送られ、帰りは見届けられる。そんな些細なことが私の中では、一つの楽しみになっていたのだ。しかし、この楽しみにも終わりが来てしまう。
それは、ある朝のことだった。いつも通り、駅員さんが、
「おはようございます。」
と、挨拶をしてくださった。しかし私はその日あまり眠れていなかったせいか元気がなく、挨拶を返さず軽い会釈のみで終わらせてしまった。当時の私は特に罪悪感も何も抱くことも無く、早く電車の中で寝たいなどの欲求で頭がいっぱいだったのだろう。挨拶だなんて帰りも明日もできる。どこかこの挨拶が私の中では当たり前になっていた。その日の帰りのこと、電車から降り、改札をくぐろうとすると、いつもいるはずの駅員さんの窓口は白く覆われ、中が見えなくなっていた。そこには「九月二十九日をもって有人駅での営業を終了いたします」と駅員さんからの手書きのメッセージが白い壁に貼られ、残されていた。あっけなく駅は無人駅となってしまった。張り紙を何度も何度も繰り返し読む。何度読んでも、もう駅員さんに会えるはずがないのに。私の心の中には、もう挨拶をして一日を始められない悲しさと、昨日、挨拶を返さずに帰ってしまったことへの罪悪感が芽生えた。次の日も次の日も、窓口は変わらず白いままだった。なぜだか、急に駅がしんみりと感じた。しばらくそんな白い窓口が続く中、ふと、駅員さんの書いたメッセージの下に目が入った。そこには、付箋や直接紙に書いた駅員さんへの温かなメッセージがたくさん残されていた。誰が書いたのかは分からないが、お礼や感謝の気持ちがどれも溢れていた。寂しい思いをしていたのは私だけじゃない。そう思えた。私も、何かお礼を書こうと思ったがすぐにやめた。いつか駅員さんに会えたら直接言いたい。
「ありがとうございました」と。
それからずっと私はこの少し寂しくて、後悔をして、でも温かな思い出をこの感動作文で伝えたいと思っていた。もう、窓口にはシャッターが降りて、駅員さんの張り紙も、みんなからのお礼も何も無くなってしまったけれども、ずっとこの記憶は駅を利用する人の心に留まるだろう。「後悔のない人生」だなんて言葉もあるけど、私は後悔してもいいと思う。そこから自分で気づく新しい発見があるからだ。
「ピピッ。」
改札がいつも通り軽快な音を鳴らす。改札をくぐっても、もう挨拶は聞こえてこない。けれど心の中ではいつも、
「おはようございます。」
今日も一日が始まる。